

# 文化高知

'98年3月 NO.82



「零文鉢」岡林隆雄



# 心の教育

吉村雄治

我々の周辺は、情報化・国際化の進展により、非常に早いテンポで変化しつづける世界の情勢に日々左右されており、常に広く世界に目を見開いて行く必要があります。

昨年来、日本においては企業の不祥事や金融、証券会社の倒産などがたて続けにおこり、社会不安を招来しています。これには種々要因はありますが、根本的には経営者が自らの行動を律する規範を失った結果ではないかと思われまます。

わが国は、自由と民主主義の社会ではありませんが、だからと言って自分の都合や利益だけを考え、自由気ままに行動してよいということではなく、社会を正常に機能させるためには、一人ひとりが自分自身の中に自らの行動を制御する厳しい規範とモラルをもつことが要求されます。

今年には是非ともお互い経営者が優れた倫理観をもち、人々から信頼され、尊敬されるような年になって欲しいものだと願っています。

私は、昨年七月に国際ロータリーの地区ガバナーに就任致しましたが、本年のテーマは「世界理解と平和」です。この問題に、我々が如何に関心を持ち、それに対応していくかが課題となっております。

今、地球上には約十億人もの「飢餓と貧困」に苦しむ人々がいます。貧困の最大の原因は、読み、書き、計算能力の欠如と言われています。つまり、これら非識字者を減らすこと即ち識字率を高めることが、ひいてはこの地球上から「飢餓と貧困」を無くすことにつながります。

この識字率向上への取り組みは、一九九〇年国際識字年を契機に、ユ

ネスコが提唱し、民間ユネスコ運動として「世界寺子屋運動」が定着し、一石を投じていますが、その成果を見るには未だ多くの時間と努力が必要で、もちろん、食糧や住居の提供援助についても、多くの世界の心ある人々により進められております。識字に関連して言えば、今の日本の義務教育、高等教育は夫々に充実して参りましたが、幼児教育の段階で反省させられる点があります。

きちんとした躰は親が家庭で、学問や人間形成にかかわる公教育の面は学校で、名々が責任を持ってやっっていくことから始めなければならぬと思います。



私は最近ある先輩から「心が人生を決める」という言葉を聞きました。確かに青年期の豊かな心が将来の生き方をきめることとなります。

よしむらゆうじ・国際ロータリー第二六七〇地区ガバナー  
青少年育成高知県民会議会長

## 「生徒」諸君

片岡千歳

季刊「生徒」という雑誌を作っている。

仲間には八人で、一応同人誌のようなものだけれど、同人誌という言葉の響きには、相集い、研鑽し、世に問うような、意欲的な文学集団を感じてしまう。「生徒」は、九四年五月創刊で、九八年一月やつと八号という遅々とした歩みでもわかるように、登校拒否的な仲間の集まりと言え始めるかもしれない。そもそも雑誌を始めきつかけも、そんなところにあった。

伊藤大さん。彼は定年退職を目前にした頃から、体調を崩して入院を繰り返していた。親友であった我が夫片岡幹雄が亡くなったことも、原因のひとつのように私には思われた。伊藤さんの発意で、「きさらぎタンポポ」という片岡の追悼集を作

った。友人知人親戚に呼びかけ編集の作業を一手に引き受け、立派な本が出来た。その時の活き活きした彼を思い出し、私は雑誌を作ることを思いついたのだ。

雑誌の名前は、伊藤さんと生前の夫との間で、いつの日か「生徒」か「弟子」という雑誌をやろうという話が出来ていて、その「生徒」を頂いたので。

伊藤博子さん。彼女は伊藤大夫人で、結婚式の時は、新郎より若輩者の私たち夫婦が、生涯ただ一度のこととなった、月下氷人の大役をさせて頂いた。以来私たちは、実の姉妹よりも姉妹のような存在となった。

織田信生さん。「タンポポ書店」が最初に店開きをしたのは、昭和三十一年で、JR旭駅前通りであった。彼は、学芸高校の生徒で詩を書いて

いた。時々作品を見せてくれた。言葉の使い方が新鮮で、次の作品が楽しみだった。「ランボーばりの詩だ」と片岡は期待していたが、何年かして出会った彼は、大きな絵本の賞を受賞した絵本作家になっていた。

シャープな言葉使いは、絵本の中で活き活きとしている。

庄田裕子さん。彼女には私は会ったことはないが、山形の小学校の先生。「生徒」の中でただ一人の先生。二人の子のお母さんでもある。

谷田菜絵さん。彼女は大学が名古屋だったので、引き続いて愛知県に住むことになった。片岡家の長女。私が雑誌を作る話を電話でしたら「それポツにならん」という。

「自分たちでやるんやからポツにはならんわよ」「なら私も入れて」という。苦いポツの体験があったのかも知れない。

堀江せつ子さん。彼女は斉藤茂吉の故郷上山にあつて、「アララギ」系の雑誌に短歌を発表している。彼女の夫、堀江氏は片岡より三月ほど早く亡くなった。彼女と私は国民学校時代二年間だけの同級生だったが、ずっと何処かで繋がっていて、共に夫を失った者として、元気づけるために「生徒」の仲間を誘った。庄田裕子さんは、堀江家の長女。お母さん

山岡道さん。彼はよくよく山の神に気に入られていらしい。役所で働く時間の次に、山にいるか山に行く相談の時間が、家族団欒の時間より長いのではないかと思う。山で彼の目に触れた植物で、描かなかつたものはないくらい、素早く画帳に写し取る。



私、片岡千歳。出席番号順に行けば、織田さんの次。今日は勝手に綴長の役を買って出たので最後に控えた。

「今日は焼きそばとビールが欲しいなあ」と思うときがある。「生徒」諸君と会をする店で「焼きそばとビール」が定番のメニューになっている。それが「生徒」諸君に会いたい私の内なるサインになった。

伊藤さん元気になって八号に作品を発表。

元気で楽しくをモットーに、世に問うよりも、自らに問うための雑誌だから「生徒」は百部しか作らない。(かたおかちとせ・古書店経営)



# 高知はわたしの父国

ジョアンナ・ヘアー

今年はお正月からいいことがありました。今、母国ニュージーランドと高知の交流に役立てないか、一生懸命考えています。

私は長く「お客さん」でした。多くの日本人たちは、私を外国人として見、ジョアンナ個人とは見てくれないで、高知でした。その壁を破ってくれたのが、高知でした。日本での私を紹介します。

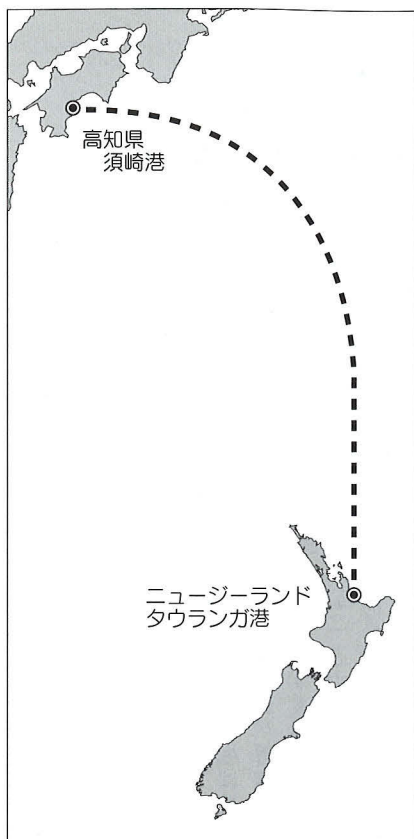
日本に来て十二年になります。大学で日本語と日本文学を専攻して、「日本ってどういうところなのか」知りたかったからです。名古屋をベースにして、英会話教師をしながら七年間、ゆっくり日本各地を探検しました。日本語はだんだんスムーズにしゃべるようになり友だちもたくさん出来ましたが、気持ちはいつまでも「観光客」でした。人生の本線から離れて、大きな脱線をしているような感じでした。

三十歳を過ぎたころから、本線に戻りたいと思い、結婚とか子供のことも考えるようになりました。外国人でいることに疲れ、都会よりもっと自然でのんびりした所に落ち着きたいと思うようになってきました。帰国する前に「最後の旅をしよう」と出かけた四国旅行がきっかけで、高知に住むことになりました。どうして高知を選んだのかと聞かれると、

もはやっているそうです。

タウランガと高知は共通点が多いです。初めて高知を訪ねた私が「懐かしさ」を感じたほどでした。交流はこれまで、木材の貿易に限られてきました。今、私には共通点を生かした交流が、次々と浮かんできます。

まず、柑橘類です。タウランガでは、毎年八月にオレンジ祭りが開かれます。高知にはニュージールランドにないブンタン、ポンカン、コナツなどがあって、それをもつてタウランガの祭りに参加すれば面白いと思います。季節が反対ですので、高知で採れない時期にニュージーランドで作れば経済的なメリットもあるでしょう。季節が反対なのは、観光にもってこいです。日本で一番寒い一月二月にタウランガのサーフィン英語学校に留学することが、最近とて



タウランガ港の近くに長く美しい砂浜が続いています。大方町の砂浜美術館に行った時、タウランガの砂浜で両方の国の作品が同じように展示できればいいなと思いました。私は大方町の考えが好きです。それは自然を生かして楽しみ、何も後に残さないということです。地球に優しい考え方です。ニュージーランド人も砂浜に限らず自然をとて大事にしていますので、ここにも共通点があると思います。他にも、「絵の中のぼくの村」をニュージーランドの人に見てもらおうとか、映画の交流もいいと思います。私は高知で和紙工芸をやっていますが、和紙に限らず作家同士の交流展もやれないでしょうか。きっと刺激になります。私は土佐和紙の美しさを見ても

まず「身構えなくつき合ってくれ」心温かい素朴で正直な人々が頭に浮かんできます。そして高知の美しい自然と和紙を思います。だけど、本当の魅力は、言葉でうまく言い表せないのですが、「なつかしい母国に帰ってきた」ような気持ちになれることなのです。

六年たった今は、高知のいごっそうと結婚し新しい家族ができ、高知は本当に私の第二のふるさとのようになりました。そして、しっかりと

らいたいと思います。

また、ニュージーランドにはマウリー族と呼ばれる音楽と踊り好きな原住民がいます。彼らの踊りはラグビーで知られています。ニュージーランド代表のオールブラックスの試合の前に必ず踊る戦闘的な踊りで、日本でも人気があります。ラグビーの面では、高知はまだですが、ヨサコイは十分通用すると思います。ここにも交流の可能性があります。

海だけではなく、タウランガには周辺に高知を思い出すような山や川があります。日本に来て十二年、私は第二のふるさとを見つけました。今、そのふるさとが母国の町との交流を始めようとしています。私は、これらの人生の目的の一つを発見でき



人生の本線に戻ったような気がします。

去年の十二月に、生まれ育ったニュージーランドのタウランガ市と高知の須崎市が友好都市になりました。私を生んでくれた母国はニュージーランドですが、もし父国（そういう言葉）があれば、それは私を優しく支えてくれる高知だと思っています。友好都市関係は両親が仲良くしてくれているような感じで、私に大きな安心感を与えてくれるのです。だから私は、この友好関係を出来るだけ応援していきたいと思っています。

タウランガは須崎と同じ港町です。今年の一月にタウランガ港と須崎港を結ぶ木材運搬船が須崎港に初入港しました。サキウイングと名づけられている定期船は片道十五日でラジエーター松の太木を運びます。この船に乗って行けば、タウランガ港に着いてから母の家まで車で十五分もかかりません。実家がとても近くなりました。一月十四日、須崎で開かれた初入港を祝うパーティーで、母国からの六人の招待客と懐かしいなまりのある英語を交わして、更にニュージーランドと高知の結束を実感しました。



RKCテレビ・こうちNOWに出演するジョアンナ・ヘアーさん

て興奮しています。

伊野町在住・和紙工芸  
・テレビリポーター



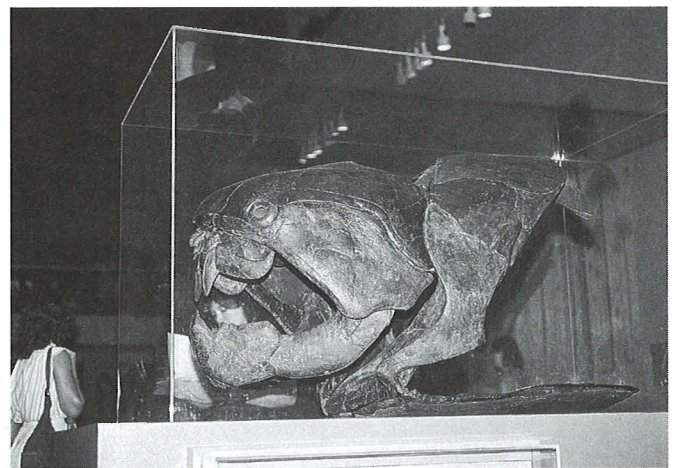
# 自然史学の復興を願って

[下]

町田吉彦

中国・四国地方の国立大学の学生を集めたセミナーに講師として参加し、博物館は必要かというテーマを与え、議論をさせたことがある。工学系の学生は、映像で生物を完璧に残せば博物館は要らないとの意見を得たと述べた。文系の学生は彼らの専門的知識に圧倒され、言葉がなかった。「いや、そうではない。実物が必要なんだ」と力説する講師の姿は、工学系の学生には化石人類に見えたに違いない。

コンピュータの発達により、三次元の映像として「モノ」の姿形を残すのは可能になった。CD化されたこの手の商品は山ほど出回っているが、映像はしよせん映像ではない。標本に優るモノはない。自然史学の方法論は徹底した比較であり、生物学で言えば、徹底した比較解剖に基づく考察である。地球上の生物の種に比べれば生物学者はものの数ではないし、生物的自然はまだまだ理解されていない。そう遠くない将来、ヒトの遺伝子の全塩基配列が解明される。ヒトも他の生物と同様、その遺伝子はアデニン、チミン、グアニン、シトシンの四種の塩基で構成されている。分子のレベルで癌に象徴される病気の発生機構が解明され、遺伝子工学の技術を駆使してそれらを防ぎ、また、生物を利用して



アメリカ国立自然史博物館の一般向けに展示されている化石魚の甲皮類の一種。ただし、展示物は精巧なレプリカである。

化学が飛躍的に進歩しても、説明困難な生命現象があれば新たな生命論が頭をもたげる危険性を常に孕んでいる。個体としてのヒトは呆気なく、やがて種としてのヒトも地球の歴史に埋没するだろう。物質としての遺伝子の解明は生命の一存在様式の解明である。しかし、ヒトは生きていく以上、「自然と生命の存在意義の認識」という知的要求に無縁であることは許されない。自然史学はこれに深く関わっている。

人類に有用な物質を生産する研究が加速度的に進行している。これらの「有益」な技術を完全に否定するつもりはないが、これらは物理化学的手法に基づいており、遺伝子は純粋に化学物質として扱われている。遺伝子操作が人類にもたらすのは幸福と不幸の双方であろうが、物質面に関するバラ色の前者だけが突出している。恐らく、人間の精神活動に多大の影響を与えるであろう後者が如何なるものかは、現時点では誰もが予想し難い。さらに、物理

スミソニアン自然史博物館、大英博物館の自然史博物館、パリ自然史博物館が世界の三大博物館として名高い。これら欧米の代表的博物館では、研究者の育成も重要な任務となっている。特にスミソニアンでは、多くの若手がアルバイトで食いつなぎ、無給の研究員としてのしを削っている。ここでの研究成果が将来の職に影響するが、職の保証がある訳ではない。魚類に関していえば、アメリカでは数カ所を除き分類学の拠点は大学で消滅し、博物館がその役目を担っている。

日本の状況も大差ない。魚類の場合はまだましなのだが、それでも教員として三人いるのは北海道大学水産学部、東京水産大学、そして高知大学理学部しかない。他の人達は一匹狼である。やがて動物群によっては専門家がなくなる事態も予想される。ようやく地方自治体が自然史博物館の設立を計画し、かなりの数が実現した。私が知る限り、設立の

構想すらない自治体は京都府と佐賀県と高知県のみである。しかし残念ながら、雨後の筍のようにバタバタと設立された博物館の多くは「駅弁博物館」とか「観光博物館」と陰口を叩かれている。自然史学が軽視され続け、また、歴史が浅い事実は覆いようがない。いくら優秀な職員がいても、周囲の理解なしに博物館の正常な機能を期待するのは酷である。

の短絡的尺度で学問分野を評価することは論外である。

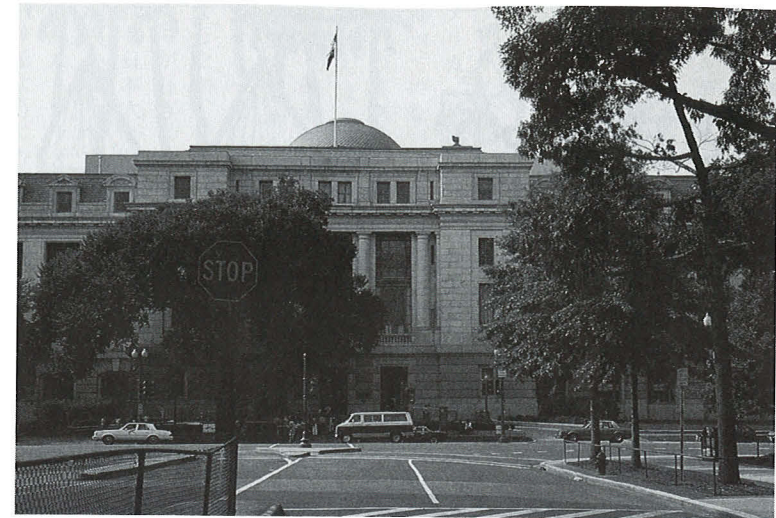
東西ドイツの統合が実現した歴史的な日、私はライデンで二度目の滞在の日々を過ごしていた。どこのEC諸国のテレビニュースであっても何時でも視ることができ。ドイツのマスコミは異常なまでに興奮していたが、



世界の甲殻類の分類学者が「エンペラー」と呼ぶオランダ国立自然史博物館のリップケ・ホルトハウス教授（写真・左）

物館や歴史的な建造物は彼らの攻撃の的からは意識的に除かれていたと思う。やはり文化のシンボルだから、このことは彼らも解っていたのだらう。人間だから……と教授は答えにくれた。

人種差別を感じる事がなかった素晴らしい国で、若輩でしかも専門外の私を対等に扱ってくれた七十歳を越える教授は、やはり博物館に相応しい。



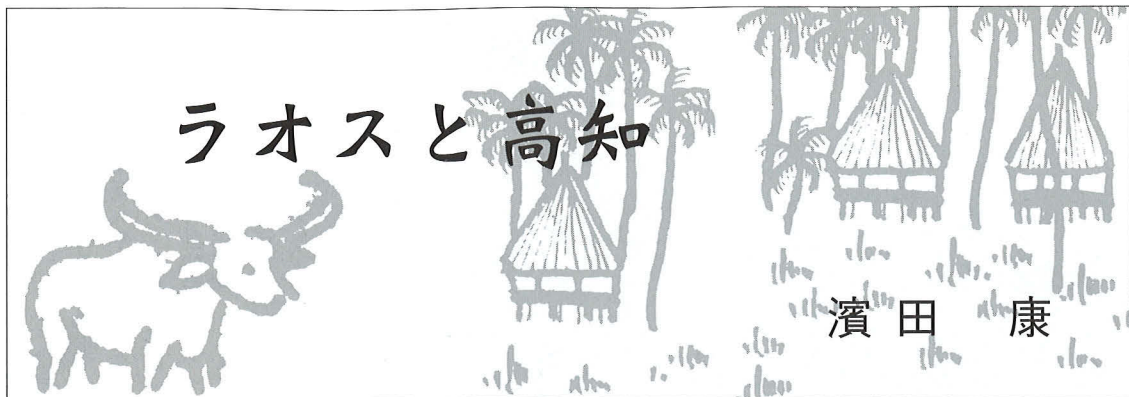
アメリカ国立自然史博物館裏正面の研究者専用出入口。一般用出入口は反対側。地上部は一般向展示室で、研究部門は地下。自然史博物館を含む12の博物館はスミソニアン協会の管理下にある。

ごく最近、日本中を震撼させた事件に有名国立大学の理系出身者が関与していることが話題になった。大学での教養教育の貧困化が問われているが、自然を理解する中でヒトをも含めた生物の存在意義や生死を考える場、すなわち精神文化に貢献する場が大学に限らず、次々に失われてきたことと無縁ではないように思う。能力主義や効率主義を振りかざし、直ちに世間に役に立つかどうか

ドイツ語は動植物の分類屋にとって必須である。数カ国語を自在に話す教授であるが、英語と並んでオランダ語に近いとされるドイツ語が彼の口から出ることは決してなかった。少しの間を置いて、「それでも、博

（まぢだよしひこ・高知）  
（完）  
大学理学部教授





濱田 康

一九九五年五月五日から十二日間、高知の国際協力事業団OBのメンバーと民間国際交流団体の会員が一緒になってタイ・ラオスを訪問しました。ラオスは同じアジアの国でありながらタイなどとは異なり余り知られていない国です。その時はわずか三日間の短い滞在でしたが、高校時代の学友である和田雅夫大使が色々骨を折ってくれたので、非常に収穫の多い三日間でした。

この国を訪問するまでは、ラオスは余り馴染みのない国だと考えておりましたが、ラオスとわが国の関係は意外に深く、大使館が開設されたのは一九五五年、その後間もなくわが国の対ラオス援助が始まっていることが分かりました。しかも革命で体制が変わっても援助は続けられ、このことがラオス側から高く評価されているようです。どんなことがあっても日本は我々を見捨てない……。

この国は、日本の本州とほぼ同じ二十四万平方キロメートル、人口は四二〇万人でちょうど四国と同じくらいです。森林資源、水資源に恵まれており、木材の輸出、タイへの電力の輸出はこの国の主要な外貨獲得源になっております。



ラオスの家々

このように人口が少なく、豊富な資源に恵まれた国でありながら、どうしてラオスは後発開発途上国なのでしょう。その原因は、度重なる外国の支配にあるようです。一九五三年に独立してすぐに始まったベトナム戦争では、ベトナムと盟友関係にあったのでアメリカの爆撃を受け人口の一％が亡くなったといわれています。今でもシエンクワンに行くとジャール平原に爆撃による穴が無数に見られます。その戦争も一九七五年に終わりますが、ついぞソ連



水牛とラオスの子供たち

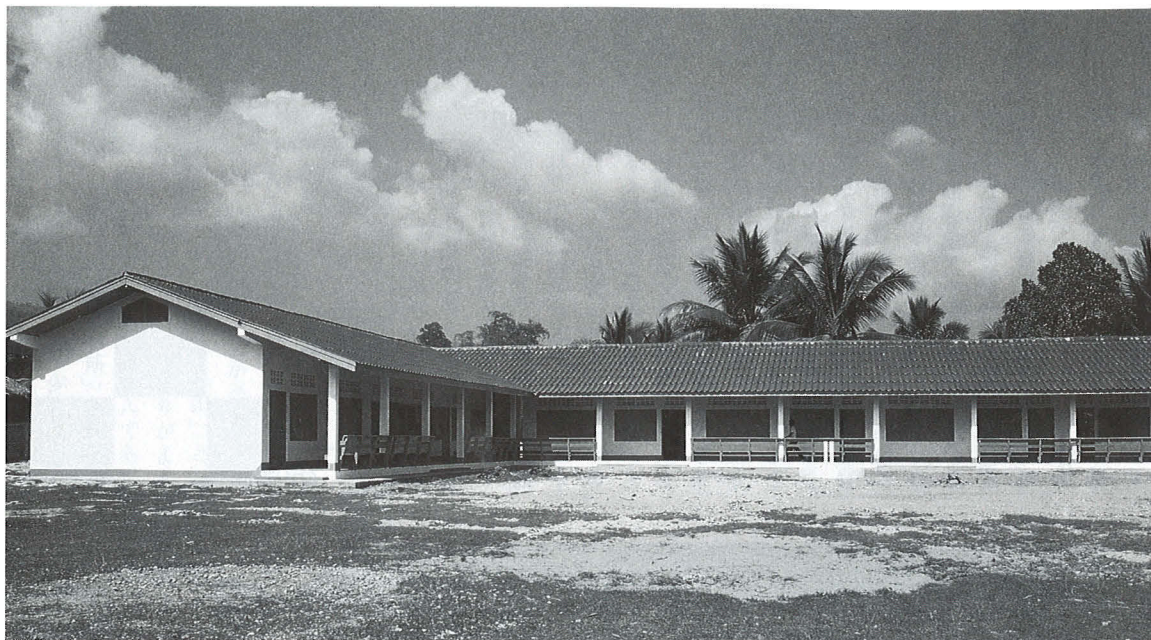
が入ってきて、この国の社会システムを破壊し、社会主義の導入を図ったわけですが、ソ連の崩壊で終わりを告げます。しかしソ連の進出で、それまであった西側の書物は焼かれ、ミッシン系のすぐれた学校は廃止されましたので、国造りの基本となる人材養成システムは根こそぎ壊されました。しかしその嵐も過ぎ去り、今ラオスは着実に立ち上がろうとしています。

ラオスは、人口密度が低く、そこで生活をする人もたいへん純朴で、

その田園風景は、今から五十年前のわが国の人情あふれる風景を思い出させるものがあります。

昭和二十年三月に旧日本軍はラオスに進駐し、四月にはフランスから独立させています。また、その時の日本軍の兵士には農村出身者が多くおり、農民に米作りや野菜の栽培法を教えたようで、現在でもこれらのことをよく知っている人が多くいます。現に私たちが訪ねた村でも旧日本軍の兵隊が来ていたというところがありましたが、彼らはその兵隊たちに悪い感情を持っていませんでした。ラオスの人たちは、フランス、アメリカ、ソ連には良い感情を持っていないようです。しかし、ラオス人の日本に対する気持ちは非常に好意的です。私は、過去何回も高知の学校の生徒、ホームステイ先の方々と一緒にラオスを訪問しましたが、皆さんこの国の人たちが好きになるようで、どうも日本人とラオス人は相性が良いようです。

私たちがラオスに学校を建設するようになったのは、当



高知の方々の募金などによって新しく建てられたラオスの学校

時の和田大使の「是非NGOで何か助けてあげてください」という要請が契機でした。そこで高知ラオス会を結成してそのことを高知の皆さんに訴えたところ非常に大きな反響があり、多くの一般の方々、高知商業、須崎中学校、横浜新町小学校、追手前小学校、また私の同級生たちから募金が寄せられ、郵政省のボランティア貯金も頂き学校建設は順調に進み、現在四校めの完成が間近に迫っております。

この資金集めについては、各学校で学園祭などで継続的に努力して下さっており、特に高知商業では、株式会社を設立してユニークな方法で資金集めをしておりますが、このことはすでに新聞などで報道され皆さんご存

じのことと思います。さてこの学校建設に対する現地での対応ですが、学校は公有地に公立の学校を建てております。それは後々の保守管理、教員の確保などを考慮に入れたもので、学校建設の契約もビエンチャン県の知事と契約をすることにいたしました。知事は真面目、几帳面な方で、契約はかならず履行してくれましたので、安心して任せておくことができます。

昨年八月に私たちがビエンチャンの県庁を訪れたとき、県の教育長が、「学校を建設して呉れたことは非常に嬉しい、それにもまして、教育環境が整い先生にも生徒にも勉強をする気分が盛り上がってきた。そのことが一番大きな成果である」と言い、喜んでおりました。

学校の落成式で、ビエンチャンの知事は「僕は森の中の小屋で勉強をした。きみたちは高知の人たちが造ってくれた立派な学校で勉強をすることができ非常に幸せだ。大いに勉強をして立派な人間になれ」というようなことを言っておりました。高知の方々によって建てられた学校から、一人でも二人でも将来ラオスを動かすような人物が出てくれることを念じております。

(はまだこう・高知ラオス会々長)



# 新春若手舞踊会

細木秀雄

新春若手舞踊会は高知県日本舞踊協会が主宰して八年前から、毎年行われている。伝統芸能にふさわしい、いわゆる踊り初めだが、各流合同であるところに意義がある。たぶんよそでは見られない、高知独自の連帯感の表れである。よそに比べると高知県の日舞界の意識が近代化されている証しである。

そしてこの会は踊り初めであると同時に、次代を担う新進、若手の育成を目指し、またその若手を指導する師匠たちの研修的な競合をもたらし、高知の舞踊文化の質的向上を図ることを目標としている。

日本舞踊の師匠は、基礎的な技術を教えると共に、個々の舞踊作品を丸ごと教えこむのだから、お弟子さんの踊りを見れば、師匠の技量がすぐ分かる。怖い世界である。

「宝船」(花柳延土佐)は、本来、江戸芝居の前狂言に由来するもので予祝的な趣を持つ。七福神に廓情趣を重ねた作柄で、弁天をめぐる恋争いに見立てた洒脱さが本態である。行儀よく踊って無難にまとめた。

「祇園の夜桜」(花柳志貴尋、志喜稔)は、大和楽らしい情緒的な曲で、舞子風俗を写した初々しい気分の踊りが好感を呼んだ。二人ともしつくりした踊りぶりだが、ややまさりおとりが目につくのは仕方がない。たぶん稽古量の差であろう。素直な資質を伸ばしてほしい。

「新曲浦島」(若柳満佳、由喜千佳、由喜裕、信菖、由喜子、由貴春)は坪内逍遙の新楽劇論の実作で、その序曲だが、いつも舞台にかかるのはここだけである。伝統歌舞伎舞踊に比べると、合理的に整然としてい

シゴかれているのは分かる。

「都鳥」(花柳宵仙華)は慣れた踊りである。容姿も踊りも母の宵寿美によく似ている。俄仕込みのお稽古ではない。しなやかな踊りで、上手だが、難をいえばのべつに一本調子で踊っている感がある。長い曲だと困るだろうが、若手のうちはこのびと踊りまくるのがいいかも知れない。

「河上遠く降る雨の」と踊りがうまく乗ってきたところで、「晴れて」で扇を落とした。踊り手としてはこ

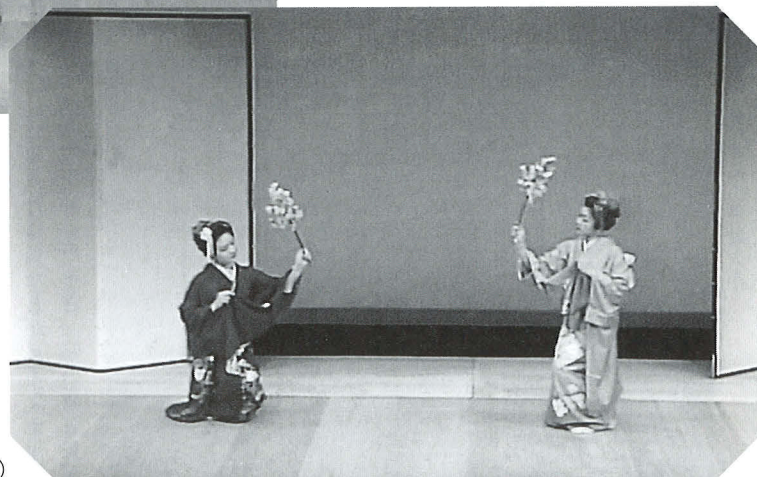
「都鳥」(花柳宵仙華)



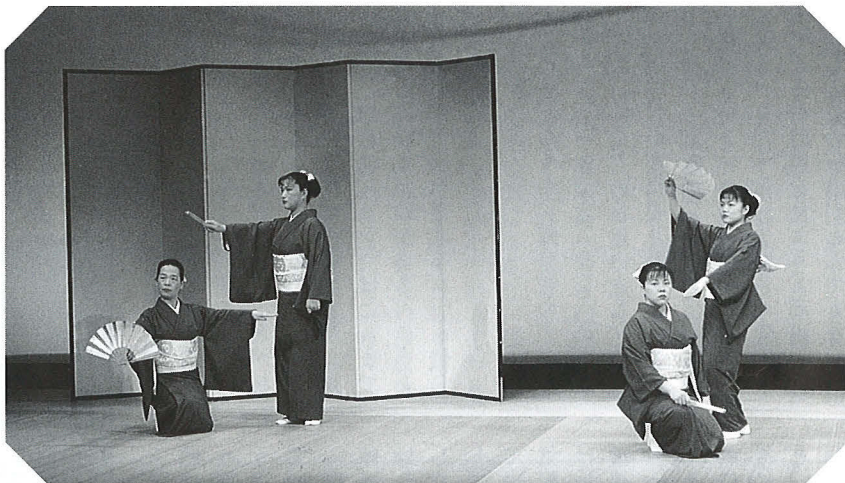
んなことに触れられたくないかも知れないが、あえて書いておく。我々は曲芸を見ているのではないからさほど気にならない。踊り手が扇を落とすことだつてある。近世最高の踊りの名人、九代目団十郎でも扇を落としていた。肝要なのは落とした後である。宵仙華はさりげなく扇を拾って何事もなかったかのように「逢う夜を待乳山」と続けて、むしろ踊りがよくなった。有望な人である。「松の名所」(若柳智寿奈)は最年少の踊り手だが、たどたどしさがな



「宝船」(花柳延土佐)



「祇園の夜桜」(花柳志貴尋・志喜稔)



「新曲浦島」(若柳満佳・由喜千佳・由喜裕・信菖・由喜子・由喜春)

「正札附」(坂東藍乃、花柳延和子)は、曾我の五郎が鎧をつかんで駆け出そうとするのを舞鶴がとめようとする「草摺引」で、荒事系の舞踊、古典的な様式性の強いのが魅力である。五郎の藍乃が抜群の実力を見せた。動きの形もいしきれいにキマる。習ってできるものではない。天性の芸味は二代目の特質ともいえる。花道の五つ頭で首を振るイキもいい。舞鶴の延和子はニンにない役でご苦労さまだが、律儀に務めて勉強にはなっただろう。

特別参加の「松」(坂東仙章)はスケールも踊りの質も技も勝ち勝っている。次代の中心勢力を成す人である。風格が加わってくる日が楽しみだ。研鑽して大成してほしい。

ほかに「風流船揃い」(藤間紫浩仙)、「風流花吹雪」(若柳彩千世)、「茶音頭」(藤間香津乃)、「鶴の壽」(坂東律三)がそれぞれ舞台を彩った。

い。初め二枚扇で踊ってから、扇一本になり、あと袂の先をにぎって袴袖のような振りになるが、いちすに踊る風情がいい。くせのないさつぱりした踊りで、どうなるか先が楽しみである。「花の色映えて」や、「契りは深き円座松」など、味なところもある。

(ほそぎひでお・高知市文化推進協議会会長)



# 動物たちの子育て ③



中西安男

《シマウマの子は親のミニチュア》

一九九六年の十一月末。

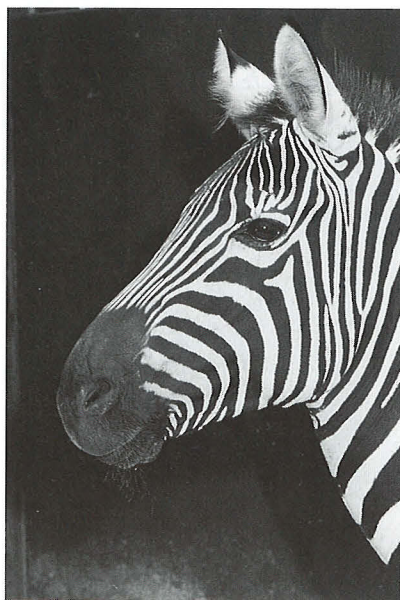
「どうぞよ、まだかよ」と、新人でシマウマの担当になって日が浅い高橋君に声をかける。新人ではあるが、風貌も年齢もおっさんである。

「まだみたいです」

「ちゃんと観察しよつたら、出産の前兆ははっきり分かるき、見逃すなよ」

シマウマの「ラン」の出産の時期が近いのである。「ラン」の腹は針で突いたら破裂しそうなほどパンパンに膨らんでいる。これまでの経験から、かならず出産前日か当日には、Dカップのように膨張した乳房から乳がしたり落ちるのである。それを確認してから産室となる寝室にたっぷりとワラを敷き、出産の準備をしてやるのだ。だから、出産が近くなると担当者は「ラン」の乳房を連日なめるように観察し「今日は乳頭の基部が膨らんだ」だの「乳房の後面が更に大きくなった」だのと、お世辞にも色っぽいはと言えない黒い乳房とのにらめっことなる。

そしてとうとう、その日がやってきた。待望の乳がしたり落ち始めたのだ。出産はその日の夜間に行われるので、その準備をしてやる。さて、「動物園の飼育係は動物の出産

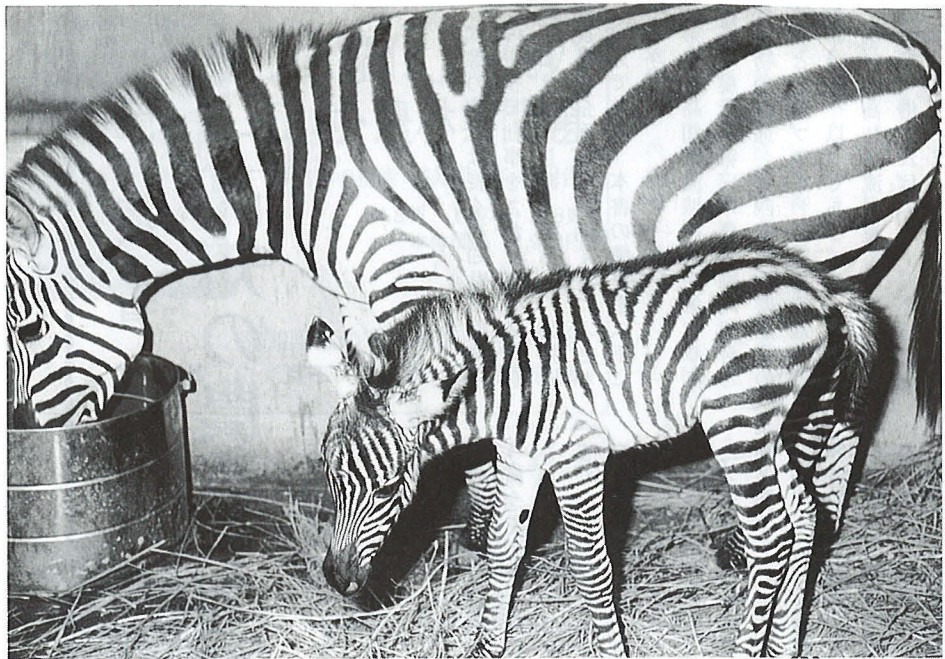


に立ち会い、手助けしてあげるのか」という質問をよく受けるが、現実にはそのようなことはほとんどない。なぜなら、動物園で飼育している動物は元は野生動物であるため、人との生活の歴史が長い家畜とは根本的に違うのである。したがって、出産もしごく当たり前に自分の力だけでこなしてしまう。人間が下手に手を出すと、とんでもないことが起こったりすることもあるので、よほどのことがなければ手をださない方がよい。それに「ラン」はこれまでにも幾度も出産の経験があるベテランであるので、すべて「ラン」を信じて任せればよい。

何年前だろうか、随分昔のように思えるが、一度だけ「ラン」の出産をこの目で見たいと思いつき、三人で出産当日の夜に張り番をしたことがある。「動物園の人間だつたら、一度ぐらいシマウマの出産を観察しておくべきだ」と、まだ若く青い考えで、その瞬間を見ようと頑張った。しかし、この行為がとんでもないこ

とを引き起こしてしまった。午後七時頃、陣痛が始まっているのを小さな覗き穴から確認した。「よし、もう少しで出産するぞ」と目を皿にして観察していた。しかし、三十分、一時間、二時間と経過しても、強い陣痛があるにもかかわらず、「ラン」は一向に出産しない。数時間が経過した時、「しまった」と自分たちのしている行為が、出産の妨げになっていることによく気が付いた。気配を悟られないように気を使ってはいしたが、「ラン」は私達の存在が精神的に耐えられないほど気になっていたのだ。

そのことに気が付き、私は事務所に引き上げることになった。三十分後に再び「ラン」の様子を確認すると、何とすでに出産した後であった。しかし、様子がおかしい。産み落と



された子はピクリとも動かないのだ。死産だ。私達の存在で「ラン」は産道に達している子を必死に止めたために、哀れにもその子は窒息してしまつたのである。私達の単なる好奇

心のために、元気に生まれるはずだった子を殺してしまつたのである。とんでもないことをしてしまつたという後悔と懺悔の中、家畜とは違う野生動物であることを痛切に感じた

苦い経験だつた。

シマウマのような草食動物は、妊娠期間が大変に長い。シマウマで約一年であるしゾウともなると二年にも及ぶ妊娠期間をもつ。これは天敵から子どもの身を守るために、できるだけ母親の胎内で成長させ、生後すぐに母親とともに歩いたり走ったりできるように発達したものである。シマウマでは通常、生後三十分で立ち上がり、

生後一時間もすれば走ることも可能だ。子どもは親と同じように編み模様があり、さしずめ親のミニチュアと言つたところで、ただ違うのは、足が大変長く、親が八頭身ならば子は九頭身と言えるほど長いのである。

こうした蹄(ひづめ)をもつ動物の子どもは、当然親と同じ蹄をもっているのだが、これが実によくできている。妊娠後期になると、母体内で子どもがかなり激しく動きまわるのだが、この時、羊膜や母体を蹄で傷つけないように、子どもの蹄は口ウのようなもので包まれている。この口ウのようなものは、生まれ落ちてから必死に立とうとする中で、取れてしまうのである。

今回の出産は十二月日の夜に行われ、翌日の朝「ラン」に寄り添い元気に立っている子どもの姿を見て、無事に出産が終了していることを確認した。子どものお腹はブツクリと膨れており、十分に母乳を飲んだことを物語っている。今度の子どもはオスで「ランタ」という名前を付けてもらい、何の問題もなく成長している。今ではかなり生意気になっているほどで、「ラン」も私達も少々手を焼いている。

(なかにしやすお・わんぱーく) (こうち・アニマルランド)

## 写真展「高知を撮る」

—第14回写真コンテスト・高知を撮る・入賞作品展—

1998/3/13(金)~3/22(日)

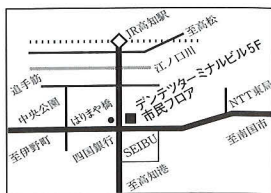
10:00 A.M.~6:00 P.M.

会期中無休 無料

場所 市民フロア

(はりまや橋・デンテツターミナルビル5階)

主催: (財)高知市文化振興事業団



第13回写真コンテスト準特選 「かみそ蒸す」 川村順二



山岡 浩 著

# 「高知の農業」を読んで

田村 安興



山岡 浩 著  
『高知の農業』  
高知市文化振興事業団  
(A5判 全247頁)

本書の著者は長く高知県の農業団体の中核で仕事をされ、高知県の農業を知り尽くした人であり、高知県の農業を全面的に展開するにふさわしい方である。本書の構成を以下に示そう。

第一章高知県流域農業 第二章高知県の農産物 第三章農業協同組合と農産物の流通 第四章高知県農業の特質と振興プラン 第五章産地づくりの展開 以上である。

第一章高知県流域農業では、筆者の言葉を借りれば「県下五十三市町村史を繙き、その地史・農史に授かりて筆を起し」した、「この史典、県農業の原点・珠玉たりてわが教典と仰ぎ、これを流域に結び合い流域農業の道筋とした」ものである。

本書の方法論の特色は、高知県農

業の地帯区分に、「流域農業」という概念を確立したことにある。このことは筆者のオリジナリティであり、また独特の切り口による地域農業論を展開しており、本書の最大のメリットになっている。言うまでもなく農業は水なくしては成り立たず、また、藩政時代以前からの村落は流域圏と深くリンクしており、各流域においてそれぞれの文化的、社会的、経済的特質を持って地域経済は発展してきた。近年国土庁は取ってつけたように「流域圏」を言い始めたが、国土政策、経済政策においてそれが

れがいかにか把握されて展開しているのかは疑問である。したがって農業政策もこの伝統的な「流域農業」に合致して進めなければならぬであろう。筆者の指摘はまさにその点で

優れた地域農業の切り口であった。筆者は次のような名文で筆を執っている。「森と川と海、農業はその大地に開かれてきた。一粒の雨粒岳源に泉み、溪谷・原野を縫いて流路延々、道中千変万化の流域を形成し河口に臨む。流路ただ一筋の如くに映るも、そこに地下広範な縦走水脈を擁し、ともに複合水脈を成してわが大地を潤す。流域は豊饒なる天地にして、農耕・村落興る。立地に拠り市場に結び、適地敵作の妙味が特産を育み、それぞれに個性豊かな風土を築いてきた」

第二章高知県の農産では高知県の主要な農産物の沿革と農業生産の概要が詳しく展開され、第三章農業協同組合の役割と農産物の流通では高知県の農産物流通と農協が果たした

大きな役割が明らかにされている。第四章高知県農業の特質と振興プラン 第五章産地づくりの展開 では高知県の農業政策史と産地形成史が紹介され、近年の厳しい農業情勢を踏まえて今後の産地づくりへの提言がなされている。

筆者は産地形成の要件として、①基礎与件農史・地理・市場 ②個別農業の経営要素―土地・労働力・資本― ③地域主幹品目の開発・育成―既成品目の継承・新規品目の開発・品目の作型と技法の改良 ④個別農業経営の品目編成 ⑤産地を担い、産地を育てる人々―地域の就農者群と先覚者―リーダーの存在 ⑥産地と農協と市場 ⑦行政の指導支援 ⑧産地の暖簾 以上の八点をあげている。

以上のように本書は高知県農業の歴史、現状、政策を全面的に展開したものである。近年、このような書物がなかっただけに貴重である。評者も本書を読み高知県の農業を改めて認識し直す点が多かった。せっかく書評の機会をお与えいただいたので、研究者という狭い見識から一言感想を述べたい。

まず、第一に本書の課題と、その展開、結論が高知県という地域農業を素材にしていかに成功しているかという点であるが、本書は狭い意味の「地理学」の書物に終わっている

のではないかと、という印象が強い。評者などには、この農業にとつて厳しい時期においてあえて農業論を展開することは、非常に勇気が要ることであり、筆には相当の厳しさが要求される。本書を読んで、瀬戸際にある農業の現状や、農業団体の危機的状態、過疎の村の厳しさが伝わってこないのはなぜであろうか。それはあるいは対象に対する、課題の認識と問題意識が著者と私とは異なるためであろうか。

第二に、本書は、社会科学の書物とするにはあまりに総花的であり、

筆者が本書を書いたねらいが読後に腑に落ちないという印象が強い。以上非礼を省みず勝手な批評を書いたが、本書は数少ない高知県農業に関する書物であり、この時代の高知県農業を知る上で有意義な書物として後世に残る書物であることは疑いない。

農業者、農業団体、農政関係者だけでなく、広く市民、県民に読ませたい書物である。特に、農産物への安全性の問題が再認識されている昨今において、地域の農業を知ること、は、われわれの毎日食べている食糧

問題への認識を深めることである。安い農産物が入り、地域農業が危機的な状況にある今日、農業の未来を生産者や農業団体だけでなく、消費者とともに議論する必要がある。筆者の言うように、農業の問題は地域の存立そのものの問題であり、本書が県下の一般の消費者にも読まれ、農業問題が広く議論される事を期待したい。

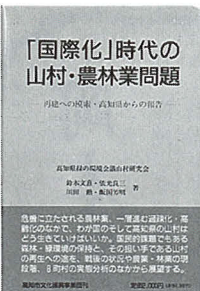
（たむらやすおき・高知  
大学人文学部教授）

## 「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

A5判・上製本・288頁  
本体価格 1,942円

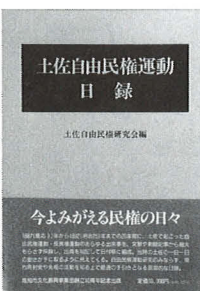
高知県緑の環境会議山村研究会  
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明 著



高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

## 土佐自由民権運動日録

B5判・上製本・函入り 496頁  
本体価格 9,709円  
土佐自由民権研究会編



## 清流を子らへ

—21世紀に残したい鏡川—

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その美貌ぶりを愛い、何とか清流を復活させ次代の子供たちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

A5判・並製本122頁  
本体価格 1,000円  
高知河川環境研究会編



## 植木枝盛の生涯

外崎 光広 著

四六判上製本・260頁  
定価 1,900円

土佐の自由民権運動を語る  
上で欠かせぬ人物植木の絶好  
の入門書





# 岡本弥太余聞

(三)

堀内 豊

池本寿が、赤岡小学校教頭の橋田寿保の自宅に呼ばれて説諭された翌朝、学校の事務員に電話をした。

「二、三日休暇をいただきますので、橋田先生にかならずお伝えしてください。おねがいします」

寿はその足で後免駅に向かった。岡本弥太にはなにも告げずに、小豆島に行くことにした。

いささか惑乱気味のじぶんの心を見定めるには、いちども行ったことのない土地で、じっくり考えてみたかったのである。

——やがて旅から帰った寿は、ひそかに弥太に連絡して、高知へ出掛けた。日曜日。知った人と出会うこともなく、北の丘のいつもの場所で、弥太と逢った。

寿は桜の木のそばに佇み、ことさら弥太から目をそらして、思いきって言った。

「弥太さん、きょうかぎりでお別れしましょう」

瞬間、岡本弥太の顔は引き曇った。

「そうか。そんな予感がしないでもなかった。……家内や橋田教頭が、きみにどんなことを言ったか知らないが、僕はきみとは別れたくない。考え直してくれないか……」

激情のあまり、岡本弥太は池本寿のからだをひしと抱きすくめた。

「きみは魔性のおんなだ。僕のこと



晩年の岡本弥太

ころを奪って遠くへ去ろうというのか。しかし僕はぜったいきみを離しはしない」

弥太のあつい息吹きが、寿の胸もとを紅く染めた。

池本寿の回想はつづく——。

「……それから数日後に、東京へ行くことと決心しました。」

動機は……小砂丘忠義先生。野村芳兵衛先生。それに作家の田中貢太郎先生たちが、国語の講習会で本山（長岡郡本山町）へ行かれるとお聞きして、小砂丘先生に無理なおねがいをし、ご一緒させていただきました。

小砂丘先生は、わたしと弥太さんのことを奥さんから聞いて、知っていたようでした。

それで小砂丘先生が本山の旅館で、どこかの学校へ紹介するから、東京へ出てこないかと、おっしゃって下さったので、いっさいを小砂丘先生におまかせするようにしました。」

池本寿が、橋田寿保教頭に辞表を出したのは、昭和七年（一九三二）十月三十日、その翌日付で依願退職の辞令を受け取った。

「——あれは、わたしが上京するまぎわでした。」

弥太さんと高知へ行って、いつもの場所でお逢いました。

弥太さんは桜の木に凭れて、だまたきり何もおっしゃってこれないから、わたしは氣詰まりを感じて、一氣に言いました。

「ねえ。いっしょに上京しましょう」

弥太さんは渋い顔つきで

「うむ。行きたいが、行けそうもない。家内と子供を岸本に残して、東京へ出ていくわけにはいかないんだ」

「じゃ、奥さんと子供さんもいっしょに連れて、東京でくらしましょうよ」

弥太さんは沈黙しましたが、しばらくたつてから、ぎこちない口調で、「とにかくもういちど此処で、ゆっくり話しをしよう」

としか言いませんでしたから、わたしは、

「済みませんが、きょうはお先へ帰らせていただきます」

と言い残して、うしろも見ずに丘を下りました。」

……この日をもって池本寿は、岡本弥太と現世でふたたび逢うことはなかった。

（ほりうちゆたか・雑文家）

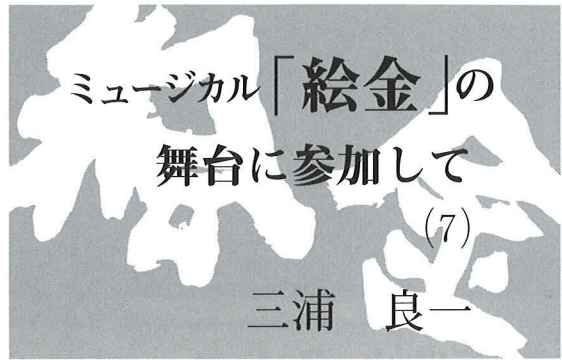
◇ こうして「絵金」の幕は下り、私の還暦記念行事の一つも、なんとかピリオドを打ったのですが、結果はどうだったでしょう。

私に関して言えば、白髪が目立つ、一拍遅れのダンスはどう見ても華麗な踊りとはいかなかったようです。「最後までよう頑張った」とは近親者からの声ですが、最後までとは、なんとか許容してくれた舞台の仲間やスタッフの方々に、捧げるべき言葉でしょう。

良い勉強をさせて頂きました。体を鍛えることの大切さを再認識、プロのパワーに触れ得るなど、貴重な体験でした。なにかと迷惑もお掛けしました。改めて機会を与えて下さった文化振興事業団に深謝し、お礼とお詫びを申しあげます。

ところで舞台作品の出来映えはどうだったでしょうか、専門的に見れば、まだまだ不満の残る仕上がりだったかも知れませんが、八九年に作られた「RYOMA」や前作の「津野山物語」を考え合わせた時、遜色のない熱気溢れる舞台だったと言えるのではないのでしょうか。

いつも自分のことのようにストレッチをリードしてくれた丸山さん。舞台経験者として、なにかと



ミュージカル「絵金」の  
舞台に参加して  
(7)  
三浦 良一

アドバイスを下さった城下さん、山北さん。そして設営や後始末にはいつも姿を見せていた池さんたち。子供連れでやり通した松田さん。等々の様子が記憶に鮮やかです。そうした姿勢と、自分との闘いに打ち勝ったみんなの結果がそこに表れたのだと思います。

ただ、敢えて言えば、夜半であっても「おはようございます」という芸能界特有のあいさつが、最後まで自分のものにならなかったように、私にはまだ、思いの残る部分があったのもまた事実です。それは何か、少し繰り返して聞きますが、エピソードとして聞いてやって下さい。

◇ それは市民による市民のための文化運動としてとらえた時、どうであったかという点です。文化を創り出すという行為は、人間の豊かさを育てることが第一義だと思います。良い作品を創り出すこと、それに集中していれば、そんなものは自然に生まれるのかも知れませんが、ともすれば、舞台表現の上手下手に捕われて、努力や誠実さ、支え合いといった基本的な人間の在り様を置き去りにする向きはなかったのか、ということですね。

私は芝居の結果も大事ですが、その過程により以上に大切なものがあると思つたのです。特に真摯な仲間づくりの場は、その事業を一過性のもので終わらせないためにも、もっと意識的に取り組むべきではなかったでしょうか。時間も経費も無かつたでしょうが、具体的に言えば、時代背景の学習や（幕末の土佐の状況や空襲のこと等）「絵」についての解釈、台本への大胆な提言、時には野外でのレクリエーション活動、そしてきめ細かな責任体制の確立等の配慮があれば、もっと主体性のある運動体が生まれたと感じるのです。

お酒を飲んでの盛り上がりも良いが、楽しく、それでいて学究的なシーンには……ダンスは……曲は……などと

気軽に語り合いながら進む、といった雰囲気があったのです。少なくとも、幕が下りたらおしまい、というのではなく、後始末にも全員が参加し、後日はアンケートや文集を作るなどして総括が出来る、といった運動体であつてもらいたかったのです。

◇ ともあれ私たちは「絵金」の舞台に参加することによって、文化創造というものが、どれだけ大変なものかを実感しました。ライトを浴び拍手を受け、おもしろおかしく楽しもうというだけの気持ちでは、この十カ月は続かなかつたと思います。厳しさの中で、みんな大きく変わったのではないのでしょうか。あの緊張した時間と空間は、貴重な体験としてみんなの中に蓄積され、育てられ、それは岩から滴る清水のように溢れだし周りの人々を潤していくものと信じます。

ミュージカル「絵金」は終わりましたが、事業の目指した文化創造の舞台は、回り続けています。一人ひとりがその運動をより確かにしていくことを誓い合いたいものです。

——とぞい、東西、お世話になりました。ありがとうございます。

——終——



## 散歩の途中で



浦戸湾の中ほど、横浜東町の鼻から東に向けて、小島が3つ並んでいる。ツツキ島、衣ヶ島、そして玉島。  
ツツキ島には神社があって、そのためか橋が架けられ陸続きになっている。整備された歩道にそってツツキ島の東側に来てみれば、すぐ目の前に衣ヶ島がある(写真)。干潮時にはつながって歩いていける。

## 風伯

### モンゴルの温もり

んだ製品を贈呈。寄金は、財政難に喘ぐモンゴルタイムス支援に……という新聞記事を読んで、一も二もなく応募した。

本社がウランバートル市にある同紙は、独裁的政府の発行する新聞に対抗する、数少ない民間新聞の一つ。九〇年四月創刊。日本支局の事業は、里親通信へサイン。

一月の大寒の日、まるで暦と符節を合わせたように、「遊牧民達の奥さん方が心をこめて作った」マフラーが届いた。  
送り主は、モンゴルタイムス社・日本支局長チ・クラシダさん。  
話は九四年の春に遡る。  
「羊の里親募集。三年後に里子の毛で編

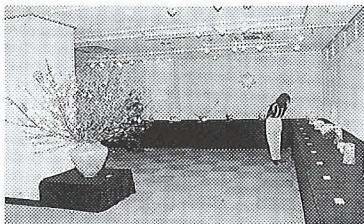
バイノー(「今日は」)の発行や、里子面会ツアーなどで、三年間に約二百名がツアーに参加している。  
諸般の事情から、製品の発送が遅れに遅れ、今年になってやっと、モンゴルの温もりを首に巻いて、冬を過ごせるようになった。  
四年前、選かな異郷の大草原を、群れと共に放浪する小羊に想いを馳せて、ささやかな夢を買った。  
だが、その後、追手前小学校へのモンゴル児童の留学、歌姫オユンナさんの二度の高知公演、博田蔵さんのモンゴル国際レーヌ(二輪車部門)三連覇、へ土佐つ子モンゴル応援隊(総勢四十二人)の彼の地の活躍など、彼等の心理的距離は、急速に縮まって、いまや「遙かな異郷」の感は無

れてきた。

## 賛助会員募集中!!

- 会費 年額 2,000円  
特典 ① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。  
② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)  
③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)  
〔※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効〕  
お申し込み ①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…  
いずれの方法でもけっこうです。

## 市民フロア(貸展示場)利用のご案内

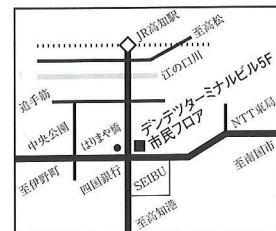


はりまや橋のデンテツターミナルビル5階に、市民の皆さんの自主的な文化活動の発表の場として、市民フロアを開設しています。個展やグループ展、会議などに幅広くご利用ください。

- 広さ・内装 約96㎡・壁面布クロス張りスポットライト完備
- 使用時間 \*展示 午前9時～午後6時 \*会議 午前9時～午後9時
- 使用料

	展示に使用	
利用時間	1日	1週間
使用料	11,000円	70,000円

- 休館日 \*毎週水曜日(撤入・撤出日) 年末年始



問い合わせ  
(財)高知市文化振興事業団  
TEL 731-43665



第13回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

## 高知を撮る

## 新天地を求めて 岡田文夫

いつまで続く「超低金利」。年金生活者はむろんのこと、金利で運営している福祉や文化事業なども、息たえだえである。その上、銀行は庶民を犠牲にして儲けた金を総会屋や暴力団にゆすられて倒産騒ぎ。まさに「チョウむかつく」話である。

利子が少ないからといって、元金に手をつけられ、その末路は見えてくる。これは、人類と自然の関係にもあてはまりそうである。

人類は誕生以来、自然が生み出す利子を頼りに生きてきた。森の木の実も、海の魚も、森や海を大切に、節度を守って採る限り、元金には手をつけず、毎年確実に利子を得ることができた。それだけではない。人類が生み出す排泄物やゴミも、自然が無害なものに変えて、土や空気に還元してくれていた。しかし、近年の大量消費、つまり大量生産の社会では、生産を支えるため、森は切られ、川や海は汚染され、自然のシステムは狂い始めた。

愚かなことに、人類は「生産」の代償

## 利子



### 風俗歳時記

人類の未来は、利子だけで生きられるシステムが再構築できるかどうかにかかっている。食い潰した元本をできるだけ元に戻すこと、少量消費、リサイクルの生活スタイルをつくるのはもちろんであるが、限られた利子を分けあう仲間の数

も無視できない。地球号の乗客はだいたい定員を超過しているのではなからうか? 環境問題もしよせんは人口問題である。「少子化」は、はたして憂うべき現象だろうか?

(路)



外崎光広 著

## 土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。  
A5判・上製本・四二四頁 本体価格一七一九円

外崎光広 編

## 土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十余点を事件別に分類・収録。原資料によつて各々の事件の実態が把握できるようにした。  
A5判・三四四頁 本体価格三、〇〇〇円

土居重俊・浜田教義 編

## 高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書  
A5判・上製本・七三六頁 本体価格六、〇〇〇円

依光裕 編著

## 珍聞土佐物語(上巻)

五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語つた地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百二十話を収録。  
四六判・三九二頁 本体価格一、五五三円

依光裕 編著

## 珍聞土佐物語(下巻)

五十人の語り部たち

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。  
四六判・四〇八頁 本体価格一、五五三円

岡林清水 著

## 高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く。旅のなかの文学史」ともいえる文学案内。  
四六判・二七八頁 本体価格一、七四八円

山本大 著

## 幕末の青春

坂本龍馬の生涯

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。  
四六判・一六八頁 本体価格一、一六五円

藤本稔子 著

## 思いつきりみとめて子育て

子育て 個育て 親育ち

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育つていく過程を描きながら子育てを考える。  
四六判・三五二頁 本体価格一、五五三円

高知市文化振興事業団 編

## わがまち百景

21世紀に伝えたい高知市の風景

高知市の誇りとして残したい風景を百カ所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。  
A5変形判・三四四頁 本体価格一、二六五円

高知市文化振興事業団 編

## 高知のエスプリ

ふるさとの未来を考える

県内のオビニオン・リーター五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。  
A5判・一六〇頁 本体価格一、一六五円

高知の文化を考える会 編

## 高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性豊かな市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。  
A5判・一八八頁 本体価格一、一六五円

清水孝之 著

## 中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。  
A5判・上製本・三三六頁 本体価格三、八〇〇円

筒井広道 著

## 画帳の歲月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。展覧の知られざる内情、肩のこらな絵画論等、興味尽きない美術への誘い。  
A5変形判・上製本・二五六頁 本体価格一、九四二円

高木啓夫 著

## 土佐の芸能

高知県の民俗芸能

現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。  
B5変形判・上製本・三四六頁 本体価格四、八〇〇円

土居重俊 監修

## 土佐弁 土佐日記

高知市文化振興事業団 編

紀貫之の名著「土佐日記」を、現代とさごとばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。  
B6判・上製本・一三〇頁 本体価格九七二円

高知県緑の環境会議 森林研究会 編

## 高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。  
B5変形・二二八頁 本体価格一、四二七円